

東名病院の患者さんから

名誉院長 村瀬 允也

「キャンピロバクターによる急性腸炎について」

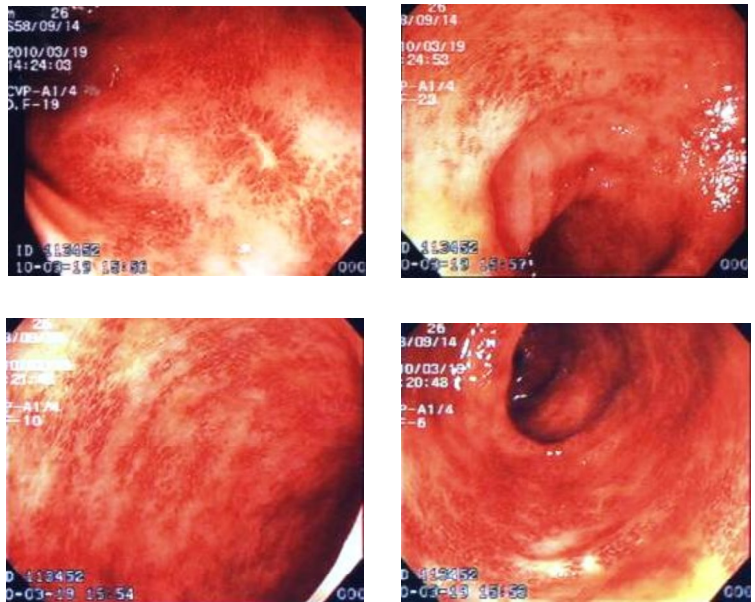
細菌性胃腸炎の中に、キャンピロバクターという細菌による感染症があります。幼児、若年者にも多く見られ、発熱、下痢、血便、嘔吐などの症状を示します。1～3割の人に1～3週後に下肢の麻痺などの脊髄障害（ギランバレー症候群）がみられるとされています。生肉、特に鶏肉の生食などで高率に発生するとされ、焼肉が多く食べられるこの頃は、特に注意すべき感染症です。最近2名の入院患者さんを経験しました。

*患者さん1 20歳男性

前日から水様性下痢が持続し、39.9℃の発熱あり来院。悪寒、腹痛とともに血便も認めました。白血球数9900、CRP5.2と高度の炎症所見を認めました。抗生剤内服、点滴により翌日には解熱、改善しました。後日、便培養で、キャンピロバクターが検出されました。ブタ肉の生肉を食べたとのことでした。

*患者さん2 26歳男性

来院前日の夜間から腹痛、嘔気、下痢あり。39.5℃、白血球11200、CRP8.1と高度の炎症反応とともに下血も認めました。点滴治療により解熱、症状は軽減しましたが、下血が続きました。大腸ファイバー検査を施行したところ、大腸全体に浮腫と点状出血を多数認め（図）、感染性大腸炎と考えられました。以後順調に回復して退院されました。



図

キャンピロバクターはニワトリの刺身、肉類の加熱不十分な場合に感染するとされ、潜伏期は2～7日と長いため、原因が確定できない場合も多いとされています。高熱、下血を伴う頻回の下痢の場合には注意すべき疾患であり、重篤な神経障害、時には敗血症、骨髄炎、関節炎、神経障害を合併する危険のある疾患です。生肉の摂取には十分注意して、避ける必要があります。